

## 生ける神に仕えるダニエル(1)

2009.1.20(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ダニエル書 6章20節

その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもベダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」

マルコの福音書 8章35節、36節

「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。」

パウロが福音を宣べ伝えた時、いろいろな人々が導かれ、救われました。多くの人々はパウロの喜びのもとでした。信仰が早く成長したからです。おもにテサロニケにいる人々に向かって、パウロは言うことができたのです。よく知られている箇所です。

テサロニケ人への手紙・第一 1章9節、10節

私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

原語を見ると、「仕えるようになり」とは書いてないのです。「礼拝するようになり」となっています。何も話さなくても、周りの人々はやはり考えるようになり、求めるようになり、偶像から立ち返るようになって、イエス様の救いを見出した人もたくさんいたに違いありません。彼らはイエス様を信じ、救われただけではなく、主に仕えるようになったのです。更にそれだけにとどまらず、再臨される主を待ち望むようになった、とあります。テサロニケの兄弟姉妹の場合がそうであっただけではなく、本来はそうであったのです。

今日から、「ダニエル」について一緒に考えたいと思います。

今、読みました箇所の中で、「生ける神のしもベダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか」とあります。

ダニエルとはどのような男であったかと言いますと、彼は、主であられる「生けるまことの神」に仕えた男でした。それは最も大切なことではないでしょうか。

今読みましたマルコ伝の箇所、「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。人は、たとい全世界、(全世界の富)を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません」と。得ても、得にならなければ、幸せになれないのではないのでしょうか。

ダニエルは、「生ける神」に仕えた者でした。二箇月前でしょうか。モーセについて一緒に考えてみましたが、テーマは、「わがしもべモーセ」でした。もちろんダニエルについても同じことが言えます。主は、「わがしもべダニエル」と言うことがおできになったのです。ダニエルは、主に仕えた男でした。たまにはではなく、いつも主に仕えた男でした。

私たちは、どのような状態にある時に、最も素晴らしく主のご栄光を拝することができますでしょうか。私たちも、ダニエルのように獅子の穴の中にいる時、悪魔が勝利を握っているかのような真っ暗闇のどん底にいるように思われる時、一番素晴らしく主のご栄光を拝することができます。主は私たちを、少しも妥協することなく、ひたすらに主に仕え、ダニエルのように奇蹟を経験する者になさりたいのです。

よく知られている祈りへの呼びかけは、エレミヤ記 33 章 3 節です。

エレミヤ書 33 章 3 節

「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」

呼ばなければもちろん駄目。「あなたに」と、ここでも複数形ではなく、単数形を使って呼びかけておいでになりますから感謝です。主はひとりひとりの祈りを聞こうと待っておられます。

では初めに、ダニエルが生きていた頃の歴史的背景を見てみたいと思います。

ちょうどその頃は、それまで世界歴史の中心に位していたユダヤ人が不従順になり、聞く耳を持たなくなり、罪を犯していたので、主が目を離され、歴史の中心がユダヤ人から異邦人に移っていくという非常に大切な時でした。その時までには、ユダヤ人が中心でした。しかし今度は、ユダヤ人でない国民、いわゆる「異邦人」が、中心になるようになったのです。異邦人の時は、紀元前 606 年バビロンの世界制覇によって始められました。

バビロンの王ネブカデネザルは、イスラエルを占領し、イスラエルの人々を虜にして、ユダヤ人にとっては外国であるバビロンに連れ帰りました。その中に青年ダニエルもいたのです。このダニエルは、バビロンの王宮に召し出され、そこで教育を受け、ネブカデネザル王に大切にされ、愛されたのだそうです。特にネブカデネザルの二つの夢を解いたので、ダニエルは非常に高い政治的地位を与えられるようになりました。虜でありながら、

けんりよくしゃ  
権力者になったのです。

後ほどダニエルは、壁に書かれた文字を解くことにより、バビロンの王の甥ベルシャツアルにより用いられ、国の三番目の位に付かせられました。けれど、おもしろいことに、このベルシャツアルによってダニエルが国の第三の司に任命された夜、王は殺されてしまいました。これはもちろん、不思議な主の御摂理だったのです。ダニエル書 5 章 29 節を読むと分かります。

ダニエル書 5 章 29 節、30 節

そこでベルシャツアルは命じて、ダニエルに紫の衣を着せ、金の鎖を彼の首にかけさせ、彼はこの国の第三の権力者であると布告した。その夜、カルデア人の王ベルシャツアルは殺され、

次の王となったダリヨスは、ダニエルを尊重して用いたわけなのですが、もしダニエルがベルシャツアルによって国の第三の司に任命されていなかったなら、ただのユダヤ人として気にも留められなかったことでしょう。ダリヨスはダニエルを用い、国の最高の司に任命しました。ダニエルがそのように用いられると、当然多くの人に妬まれる結果になりました。ダニエルを何とかして失脚させようとする人々がたくさん出てきました。

妬む人々は、手段を選ばずダニエルを殺そうとしましたが、ダニエルには隙がありませんでした。彼は熱心に、真面目に怠ることなく務めを全うしたのです。悪魔はダニエルに敵対する人々を用いて、計画を巡らしました。「あのダニエルはユダヤ人だ。彼は、唯一の神を拝し、私たちの神を拝まない。彼は宮や寺を訪ねない。偶像には見向きもしない。けれど、彼は毎日、「生ける神」と言われる「唯一の神」を拝んでいる。彼を失脚させるために、一つの法律を設けよう」と計画を立てました。6 章を読むと分かります。

ダニエル書 6 章 6 節から 9 節

それで、この大臣と太守たちは申し合わせて王のもとに来てこう言った。「ダリヨス王。永遠に生きられますように。国中の大臣、長官、太守、顧問、総督はみな、王が一つの法令を制定し、禁令として実施してくださることに同意しました。すなわち今から三十日間、王よ、あなた以外に、いかなる神にも人にも、祈願をする者はだれでも、獅子の穴に投げ込まれると。王よ。今、その禁令を制定し、変更されることのないようにその文書に署名し、取り消しのできないメディアとペルシヤの法律のようにしてください。」そこで、ダリヨス王はその禁令の文書に署名した。

これに対してダニエルはどのような反応を示したのでしょうか。不安に思ったのでしょうか。「大変だ。大変だ」と騒ぎ立てたのでしょうか。

ダニエル書 6 章 10 節

ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。—彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。—彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

人間的に考えるならば、もうお終いです。もう逃げられません。終わり。もし妥協しなければ...。けれどその時、このダニエルは神を礼拝しました。心から感謝したのです。

ダニエルは、もちろん既に久しい間祈りの人でしたから、何を聞いても、何を知らせられても、「祈ろう」という態度をとりました。「生ける神」は自分の祈りに応えてくださるということ、何度も何度も体験してきたからです。ですから、自分の身に危険を及ぼす計画を知った時、主にすべてをおゆだねしました。いくら心配しても何もできません。

ペテロが、新約の時代に、当時の信じる者を励ますために、また力づけるために書いたことばがあります。

ペテロの手紙・第一 5章7節

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

「神が心配してくださる」と。自分で心配することは愚かそのものです。全く意味のないことです。

ダニエルは、思い煩いをすべて主にゆだねました。ダニエルを妬む人々は、ダニエルが主に祈ることを知っていたので、王以外の者を拝んではならないという法律を作ったのです。ダニエルが主の御前に祈っているところを、即ち法律を破っているところを、彼らは見つけました。

ダニエルは、隠れた信者でいるよりは死んだほうがまだ、と考えていました。彼は、全く恐れを持っていなかったのです。ダニエルは身の危険を覚え、自分の高い地位を捨てて、逃げることもできたはずですが、更にダニエルは窓を全部閉め、押入れの中の誰も見ていないところで、小さな声でこっそりと祈ることもできたはずですが、けれど、そうしませんでした。ダニエルは、「自分のいのちはどうでもいい」と、自分のいのちを軽く見ていたのでしょうか。決してそうではありません。彼は自分のいのちを軽く見ていたのではなく、彼は、「自分は決して隠れた信者にはならない」と、堅く心を隠れたからです。

ダニエルは、獅子のような性格の持ち主でした。獅子よりも勇気を持っていたのではないのでしょうか。窓を開け放し、諸手を挙げてエルサレムに向かって祈るのは、ダニエルの習慣でした。どんなに敵が見ていてもそれには目もくれず、ただ主に心を向けて祈るのは、彼の毎日していたことでした。大胆にも窓を開け放して祈るということは、ダニエルが一時的な衝動に駆られ、「から元気」でやったことではありません。成熟しきった男が、よく静かに考えて決めたことでした。ダニエルはその頃70歳から80歳だったと思われます。共にバビロンに捕らわれてきた同胞にとって、彼は何という素晴らしい証し人だったのでしょうか。彼は公に祈り、公に証しし、人の誉れを少しも望まなかったのです。したがって、全く恐れを持っていませんでした。

妬む人々は祈るダニエルを見つけ、自分たちの定めた法律を破ると言って、ダニエルを訴え出しました。彼らの思いはただ一つ、「あのユダヤ人を引き降ろしてしまおう」という思い

でした。他の人々につき従い、多くの人々の中に混じってついていくなら、当たりさわりありませんが、天の主のご支配を日々の生活に受け入れ、それに心から従おうとする者には、誤解があり、迫害があります。

ダリヨス王はショックを受けたいと思います。何とかしてダニエルを救いたいという気持ちがあったのです。即ち、王の前には二つの道がありました。一つは、ダニエルを獅子の穴に投げ込んで殺してしまうことであり、もう一つは、自分の定めた法律を破棄して、「ダニエルを救う」道でした。ダリヨスにとっては異邦人の、「生けるまことの神」を知らないのて、「自分のこと」を考え、ダニエルを獅子の中に投げ入れることに決めました。

しかしダニエルは、6章を見ると分かりますが、獅子に引き裂かれませんでした。天使がダニエルを守ったのです。どのようにして守ったのか、聖書には書いてないので分かりません。ダニエルの体を豊かに包んで守ったのか、天使が獅子の口を開けないようにしたのか、または獅子の目の前に火を置いて、獅子を恐れさせたのか、もちろん分かりません。ただ一つ分かることは、その夜ダニエルは獅子の穴の中でぐっすり寝たということです。(もしかすると、獅子のたてがみを枕に寝たのかもしれませんが。)この夜は、主のご臨在が、ダニエルを荒れ狂う野獣から守りました。

これに引き換え、ダリヨス王はまどろむこともできなかったのです。

ダニエル書 6章 18節

こうして王は宮殿に帰り、一晩中断食をして、食事を持って来させなかった。また、眠けも催さなかった。

気の毒な男です。

ダニエルのように私たちも、真っ暗な所に落ち、危機にさらされ、試みられ、戦い、苦しみがく真っ暗な夜のような時を過ごしたことがあるかもしれません。また、今そのような所に陥っているかもしれません。その時こそパウロとシラスのように、真夜中の牢屋の中で主を賛美することができたら幸いです。そのときもしかすると二人は、主のために証し奉仕したゆえに、また主に対する信仰のゆえに捕らえられ、牢獄につながれ、体は血で染まっていたかもしれません。しかも時は夜でした。真夜中ごろでした。どのようになるか、もちろん分からなかったのです。

では、ダニエルはどのようになっていたでしょう。ダリヨス王は、翌朝まだ早いうちに大急ぎで獅子の穴に行き、生きていたダニエルを引き出させました。私たちはこの出来事から何を読み取ることができるかについて、考えたいと思います。

初めにはっきり言えることは、幼い時から、ダニエルは自分を主にゆだねたということです。彼は主を信じたばかりではないのです。自分自身を主にゆだねました。もう一度6章16節を読み直します。

ダニエル書 6章 16節

そこで、王が命令を出すと、ダニエルは連れ出され、獅子の穴に投げ込まれた。王はダニエルに話しかけて言った。「あなたがいつも仕えている神が、あなたをお救いになるように。」

ダニエル書 6章 20節

その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」

ダリヨス王は今までのダニエルをよく知っていたので、「ダニエルの神」は常にダニエルを守っておられることを知っていました。また、王は、ダニエルが常に「生ける神」に仕えていたことも知っていたのです。

ダニエルは、幼いときから主に心から仕えた者でした。いつも主のみこころを尋ねることをしていましたので、それは彼の性格となっていました。ダニエルは、若いときから主に仕えていましたので、彼の心は、「主を恐れる恐れ」に満ちていました。

ダニエルにとって、それは決して簡単なことではなかったのです。彼の環境は、異邦の国でした。イスラエルから連れて来られ、異邦の教育を受け、異邦の文学も異邦のものを学びました。学ばなければならなかったのです。けれど「まことの神」を恐れる「恐れ」は、ダニエルに、異邦のものと妥協することを避ける勇気と力を与えました。

「王と同じ食べ物を食べなさい」と言われたことがありましたが、ダニエルは、「偶像にささげた物なので食べない。絶対に食べない」という態度をとったのです。王の食べ物はおいしかったと思います。最高の材料を使ったものでしょう。必ず良いものであったに違いありません。けれど彼は「嫌です」と。それは、王の食べる物は食べる前に偶像にささげられた物だったからです。ですから、ダニエルは「嫌です。食べられません」と。即ち、彼は王に喜ばれようとは一時も思ったことがありませんでした。ただ「主だけをお喜ばせしよう」と、主に仕えました。

私たちは、ダニエルが食べたり飲んだりすることは、そんなに大切なことではないのではないかと思うかもしれませんが。けれどダニエルにとって、主の言葉を一つ残らず守るということは、かけがえのない大切なことでした。「主を恐れる恐れ」から、彼は「主の命令」を破ることを恐れました。

主のみことばの中には、いわゆる外面的なことが確かにたくさん書かれています。例えば「パウロの時代はそうだったが、今は時代が違うからこれは当てはまらない」などと、みことばを曲げて受け取るなら大変です。聖書は、「神のことば」ですから。「永遠に変わらない」みことばです。ひとつひとつのみことばは、主なる神の靈感によって書かれてい

ます。それを認め、また従順に従うならば、必ず祝福されます。主に對する全き服従には、素晴らしい豊かな恵みが伴うのです。ダニエル書1章を読むと分かります。

ダニエル書 1章 15節

十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。

ダニエル書 1章 20節

王が彼らに尋ねてみると、知恵と悟りのあらゆる面で、彼らは國中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっているということがわかった。

倍ではなく十倍です。ダニエルはすべての若者よりも健康が勝り、他の博士より知恵と理解において十倍も勝っていたとありますが、これは主のみわざであり、主の祝福でした。

ダニエルの出来事を見てくださいと、私たちは、常に主に仕えるには勇気が必要であることが分かります。この勇気は祈りによってのみ生まれます。主と一つになることによってのみ、勇気が出てきます。知恵と理解力、主なる神の奥義を知る力も、祈りによってのみ生まれてくるのです。

呪法師、魔術師たちは夢の解き明かしができませんでした。ダニエルはできました。祈ったからです。祈りのうちに夢の解き明かしを教えられたからです。常に、絶え間なく主に仕える者には、主の奥義が現わされてきます。

ダニエルは、異邦の王の権威の前に小さくなっていませんでした。恐れることなく自分の仕える主の御名を口にしています。後に、国の司にまで引き上げられてもなお、主に仕え続けました。ダニエルはどんなに真っ暗なところに落ちて、また、高く栄誉ある立場に立たされた時も、変わらずまことの神に仕え続けました。

ダニエルはまたある時、ネブガデネザルが見た二つ目の夢を解き明かしたことがあります。この夢は、王が動物のようになってしまうという恐ろしい夢でした。ダニエルは、この時も王を恐れず、王に恐ろしい夢の解き明かしをしました。「あなたは動物のようになり、気違いのようになる」と。ダニエルは、常に変わらず王の恐ろしい夢の解き明かしをしたのです。ダニエルは、常に変わらず主にだけ従いました。

その出来事の後、しばらくの間、聖書にはダニエルについて記されていません。けれど、この間にもダニエルは、共に捕らえられていた同胞の間でよく証したに違いありません。ところが突然、壁の奇妙な文字を解き明かすために、ベルシャツアル王に呼び出されたのです。恐ろしい支配者の前にダニエルは勇気を持って出ました。ベルシャツアルが、ダニエルを殺そうと思えば、すぐにでもそうすることができました。この暴君の前でさえも、

ダニエルは少しの恐れも持たず、真理を包み隠さず伝えました。

ダニエル書 5章 25節から 28節

「その書かれた文字はこうです。『メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン。』そのことばの解き明かしはこうです。『メネ』とは、神があなたの治世を数えて終わらせられたということです。『テケル』とは、あなたがはかりで量られて、目方の足りないことがわかったということです。『パルシン』とは、あなたの国が分割され、メディアとペルシヤとに与えられるということです。」

ダニエルは幼いときから、自分の「生けるまことの神」にのみ仕えていこうと決めていました。ベツシャツアルの前にもその通りでした。世界の支配者は次々と変わっていきましました。しかし、ダニエルだけは変わらなかったのです。今日はこう、明日はそのようにと、環境によって行く先を変えるようなことは、ダニエルにはできなかつたのです。ダニエルは、常に主にだけ仕えたのです。主の栄光を現わしていくことが、ダニエルの持っていたただ一つの目的でした。

ダニエルは、ダリヨス王の下で総理大臣を務めていました。しかし、彼は、異邦の偶像礼拝を全くしなかつたのです。「妥協は霊的な死を意味する」と、彼は固く信じていました。高い地位についていながら、常に主に仕えるということはそんなに簡単ではありません。難しいことです。何と多くの人々が高い地位を求め、また、名誉のために、主から捨てられていったことでしょう。人気、栄誉、地位、富、これらは悪魔が用いる最も鋭い試みの武器です。ダニエルは、これらには目もくれず、ただ主に仕えて、「生けるまことの神」に仕えていたしもべでした。

ダニエルからもう一つ教えられることがあります。主に支配されている者は、友を自分のものとし、自分の環境を変えるために妥協するようなことは決してしない、ということです。何も無い時に主に従うことはそんなに難しくありません。けれど、戦いが起こり、暗闇の中に入った時に、本当に自分が主に根ざして歩んでいるかどうか明らかになってきます。

もし、ダニエルがこのまま続けてどこまでも主に従っていくなれば、彼は王の寵愛を失うばかりでなく、一番哀れな死に方をしなければならぬ結果に立ち至ります。主だけを礼拝するか、獅子の穴に投げ込まれるかというところに立たされました。けれど、ダニエルは少しの妥協も見せませんでした。多くの迫害者に取り巻かれ、危険の真っ只中にありながら、彼は「まことの神」、「生ける神」に祈り続けました。

私たちもこのような危機に遭遇したことがあるのでしょうか。あなたは主のみこころを知っていましたので、主に従いました。もし妥協したなら、その時、あなたは友を得、居心地の良い環境に入ることができたでしょう。しかしあなたは妥協せず、「主にだけ従った」

ので悩むようになりました。あなたは、行く末が全く分からなくても、いつも主に付き従っていき、勇気を持っているでしょうか。ダニエルのように不安な良心を持って過ごすより、むしろ貧しくても、また誤解されたとしても、そのほうが良いと思っているのでしょうか。

悪魔は、必ずダニエルを誘惑したに違いありません。「お前は国の長官であり、しかも、「まことの神」を礼拝している。だから今、お前がその地位を失わないようにするため、また、「まことの神」を礼拝することを続けたいなら、法律で定められた30日間だけ、戸を閉めてそこで祈っていたら良いではないか。お前は異邦の国にはたとえ主の証し人だ。少し妥協して戸を閉めて祈り、神を礼拝すれば良いのではないかと囁いたことでしょう。

多くの人々は、目的のためには手段を選ばずで、目的に到達さえできれば、少くも妥協しても方法はいつでも良いと考えます。しかしダニエルはそのようなことはしなかったのです。その結果がどうであろうと、「主を恐れる恐れ」を持ち続けることが、ダニエルにとって最も大切なことだったのです。

私たちは結果を見る必要はありません。日々主の御声を聞き、それに従っていくことだけが、大切なのではないのでしょうか。結果がどうであろうと、たとえ悪くても、主が責任をとってくださるはずで。

ダニエルは、絶えず主にだけ従っていました。ですから、結果を少しも恐れなかったのです。お腹のすいている犬は、肉を見せると必ず跳んで来ます。そして、その人に従っていくでしょう。けれど、満腹した犬は見向きもしません。多くの人々は、目に見えるところに従っていきます。少し何かが起こると、自分の立場を良くし、楽にしようと、妥協して、自分の考えで行動してしまいます。けれど犬によっては、道が良くても悪くても、雨が降っても、槍が降っても、主人に従う犬もいます。

イエス様は、「どんなことがあっても主に従い、仕える者」を、父なる神に言い表わしておられるでしょう。私たちは、ボートを漕いでいる人のように、顔だけは神に向け、実際には主に背を向けて、反対の方に走っていつているような状態にないのでしょうか。

世界に一つの群れ、一つのクラブがあります。このクラブは、末の世になればなるほど会員が増えていきます。このクラブに属する者の名は、いろいろあります。ある人の名は「二面相さん」「二股公約君」。平安、平安と言っているが、実は平安のない「不安さん」。愛、愛と言って、妥協しても、まことの愛だと言っている「偽善君」。二つの舌を持っている「二枚舌さん」。それから、時々しか主に仕えない怠け者の「不忠実君」。このような、いろいろな名前の人々がこのクラブにいます。

あなたが親しい友だちを持っていて、その人を愛し、尊敬していたとします。けれど、もし自分が苦しみで遭い、逆境に置かれ破産したときには、その友はあなたを見捨てたとします。そのような時、あなたはその友を許すことはできるかもしれませんが、「もうもう

じゅうぶん まじ ほ おも  
充分だ。交わりも欲しくない」と思うのではないのでしょうか。

わたくし とち じゆんきよう とし よるこ しゆ つか ぎやつきよう としどき  
私たちも、その友のように、順境の時は喜んで主に仕えるが、逆境になると、時々  
しか主に仕えない者ではないのでしょうか。

しゆ ちと もの すなわ つね しゆ つか つづ  
こんにち主が求めておられるのは、ダニエルのような者です。即ち、「常に主に仕え続け  
る者」です。主を信じる者というだけではなく、「主に仕える仕え人」です。

こころ き すこ どうよう た なん  
どんな試みが来ても、少しも動揺しないでしっかりと立っているためには、何としても  
ダニエルのような「祈る人」とならなければ駄目なのではないのでしょうか。祈りは、強い  
せいしつ あた  
性質を与えてくれるものです。

了